

Feb. 04. 2011

JSEKM (The Japan Society for Electronic Keyboard Music)

News Letter

No.11

日本電子キーボード音楽学会ニュースレター

～日本電子キーボード学会「第6回全国大会」レポート～

*総会后、日本電子キーボード音楽学会に名称変更

目 次

1. ごあいさつ/下八川共祐、柳田孝義・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
2. 総会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
3. 基調講演/シュテファン・メーカー・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
「電子鍵盤楽器と私の関わり」(通訳 野口剛夫)
4. パネルディスカッション
「ハードからみた電子オルガン演奏の新たな側面 - II」・・・・・・・・ 8
和智正忠、三枝文夫、森下絹代 (パネリスト) 柴田 薫 (司会)、海津幸子 (報告)
「M.L.授業のためのテキストを考える - II」・・・・・・・・・・・・ 11
柳田孝義、赤津裕子、脇山 純 (パネリスト) 森 直紀 (司会)、西山淑子 (報告)
5. ラウンドテーブル 阿方 俊、影山建樹、小沢真弓 (報告)・・・・・・・・ 13
6. ランチタイム・ミーティング 森松恵子 (報告)・・・・・・・・・・・・ 14
7. 研究発表
Room - 1・・安井正規、小熊達弥、森松慶子 諸井野ぞ美 (司会・報告)・・・・ 15
Room - 2・・影山建樹/望月慎也、小澤真弓、西山淑子 仁田悦郎 (司会・報告)・・・・ 17
Room - 3・・梅都優子、佐藤美千枝、阿方 俊 柴田 薫 (司会・報告)・・・・ 19
7. 研究コンサート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
電子オルガンと管打楽器によるハイブリッド・オーケストラ
8. 全国大会に出席して・・程 松野、金銅英二、芝崎ひろ子、明石麻裕・・・・ 22
6. 編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

日本電子キーボード音楽学会 事務局

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1 昭和音楽大学内 阿方 or 生頼気付

Tel : 044-953-1121 Fax : 044-953-1311

H.P. : <http://jsekm.6.ql.bz/index.html> E-mail : jsekm@view.ocn.ne.jp

第6回全国大会レポート

2010年10月10日、第6回全国大会が昭和音楽大学において次のスケジュールで開催されました。

- 10:30 あいさつ 下八川共祐 柳田 孝義
10:45 基調講演 シュテファン・メーラー
11:45 総会
12:00 昼食
13:00 パネルディスカッション - 1 (電子オルガン)
和智正忠、三枝文夫、森下絹代 (パネリスト) 柴田 薫 (司会)、海津幸子 (記録)
パネルディスカッション - 2 (M.L.)
柳田孝義、赤津裕子、脇山 純 (パネリスト) 森 直紀 (司会)、西山淑子 (記録)
15:00 研究発表
Room - 1 安井正規、小熊達弥、森松慶子 諸井野ぞ美 (司会・報告)
Room - 2 影山建樹/望月慎也、小澤真弓、西山淑子 仁田悦郎 (司会・報告)
Room - 3 梅都優子、佐藤美千枝、阿方 俊 柴田 薫 (司会・報告)
17:00 研究コンサート 電子オルガンと管打楽器によるハイブリッド・オーケストラ
18:00 懇親会
以下、レポートです。

あいさつ

下八川共祐 (昭和音楽大学理事長)

本日はお忙しい中ご参加いただきありがとうございます。この大会では会場担当校からのご挨拶が恒例なので高いところから失礼致します。私ども電子キーボード学会は2005年11月5日、本学北校舎で第一回目の全国大会を行いました。当初60名ほどだった会員が現在110名を越えるところまで参りましたが、これはひとえに会員の皆様のご努力の賜物です。



現在、本学のミュージカルやバレエの公演では、電子キーボードと管打楽器を用いたハイブリッドオーケストラがなくてはならないものとなっております。本日の研究コンサートで授業の延長線としてその一端をご紹介いたしますので、忌憚りの無いご意見を賜りたく思います。また本学ではミュージックラボラトリーを推奨しております。いろいろな先生方のお考えもあってなかなか難しい面もありましたが、やっ

とここ1、2年で定着して参りました。私個人は、ミュージックラボラトリーはソルフェージュ教育、スコアリーダーディング、即興演奏等いろんな分野で役立つと考えておりますので今後もどんどん推奨し

で参りたく存じます。

今日はシュテファン・メーラー先生がはるばるオーストリアからおみえになって、素晴らしい講演をして下さるのが楽しみです。また先日、元ミラノ・スカラ座の演出家だったA.マダウ・ディアツさんが来校されました。第一線からは退いていますがオペラへの情熱はまだ衰えず、今後、電子オルガンを積極的に使っていきたいので、日本から援助をしてもらえないかという話が出ました。現在イタリアでは政府の芸術文化支援が減少し、オペラ関係者も苦勞されており、小さな劇場で新たな電子楽器を活用したオペラの上演を考えておられるようです。そういった場面では是非電子オルガン等の電子キーボードが役に立てばと思います。

本日が稔りのある大会になるように祈念しております。ありがとうございました。

あいさつ

柳田孝義（日本電子キーボード音楽学会代表幹事）

おはようございます。今回の第6回目の大会開催にあたって、多くの関係の方々にお世話になりました。この学会の発足地でもある昭和音楽大学で第6回目の大会を開かせて頂くことには、大変意義があります。また、今回の基調講演は、シュテファン・メーラー先生にお話し頂きます。海外の方に基調講演をして頂くのは本学会では初めてのことで、外国の方から電子キーボードはどう見えているのかをお伺いするのが楽しみです。

一昨年吉田先生の後を引き継いで代表幹事の役をお受けし、この学会が外に向かって開かれ、外に向かって発信するとともに外の刺激も受けることが大切ではないかと考え、昨年のご挨拶の中でも同様のことを申し上げました。この1年間、外国語版のホームページの準備も始めております。今年の8月には、ISME（国際音楽教育学会）の大会が北京であり、そこに昭和音楽大学の電子オルガンアンサンブルが出演し、大変高く評価されました。私たちと研究活動を共にしている学生が評価されたことを嬉しく思います。

本年は昨年にもました多くの研究活動報告やパネルディスカッションが予定されており、生涯学習に参加する市民の活動報告などもあります。また、ランチタイムに地域で音楽活動をされている方々のミーティングも予定されています。これまでのカテゴリーに収まらない多岐にわたる企画が広がりつつあるのは喜ばしいことです。この年に一度の大会で、多くの貴重な報告や提言を得られることと思います。ありがとうございます。



総会で議長を務める柳田代表

日本電子キーボード学会第6回総会

*総会后、日本電子キーボード音楽学会に名称変更

総会は、以下の議案について審議されました。

報告事項：(1) 2009年度下半期～2010年度上半期事業報告
(2) 2009年度会計・監査報告
(3) その他

協議事項：(1) 2010年度下半期～2011年度上半期事業案
(2) 編集委員会規定第4条の任期について・・・改訂
(3) 学会誌投稿規定について・・・改訂
(4) 役員選挙結果について
(5) 学会名称について・・・日本電子キーボード音楽学会に変更

The Japan Society for Electronic Keyboard Music

(6) 第7回全国大会開催候補地について・・・(後日、11月12日、東京学芸大学に決定)
(7) その他

報告事項(1)の2009年度下半期と2010年度上半期の事業報告に続いて、赤石敏夫監査役から(2)の2009年度の会計・監査報告がなされ、承認されました。

協議事項(1)の2010年度下半期から2011年度上半期の事業については前年度と同様の内容で行うことが了承されました。

同(2)と(3)については、添付資料の改定案が了承されました。なお、資料の学会名については(5)の新学会名が承認されたので、以後、新名称に変更になります。

(4)の役員選挙結果で 柳田孝義、下八川共祐、出田敬三、阿方 俊、吉田泰輔、仁田悦朗、海津幸子、小倉隆一郎の8名が選出され、協議の結果、代表=柳田孝義、副代表=下八川共祐、出田 敬三、事務局長=阿方 俊、また代表の裁量で中地雅之(次期大会会場)と森下絹代の両氏が加わり規定の10名体制となりました。

(5)学会名称は、今後の国際化などを踏まえて現在の名称に音楽を加えた「日本電子キーボード音楽学会」、英語名「The Japan Society for Electronic Keyboard Music」への変更が承認されました。ホームページは、移行期間として当分の間、併せてアクセスできますが、総会以後に変更された内容については新しいもののみとなっています。メールについても、新メールjsekm@view.ocn.ne.jpに変わりましたが、旧メールも当分の間使用できます。

新メール変更を機に会員へのニュースレターや諸連絡をメール媒体で行っていきたく、近々に会員各自にメールアドレスの確認作業を行います。

(6)第7回全国大会会場については、総会時には交渉中でしたが、11月12日(土)、東京学芸大学(中地雅之実行委員長)に決定されました。

どうぞスケジュールにご記入をお願いいたします。

基調講演 “電子鍵盤楽器と私の関わり”

シュテファン・メラー (ピアニスト・指揮者/ウィーン国立大学教授)

通訳 野口剛夫 (昭和音楽大学)

本日は、音楽家としての立場から、ヨーロッパの音楽の伝統から日本の先端技術がどう見えるかを話したい。楽器というものは芸術と技術の接点にあるもので、両方の側から光を当てるべきである。今年の3月、私は東京でベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番を、ヤマハの電子ピアノ“アバングランド”で演奏した。伴奏は4人の電子オルガン奏者によるジャパンエレクトロニックオーケストラ、指揮は今通訳をして下さっている野口剛夫氏。これが電子鍵盤楽器に関する直近の経験である。

私は伝統的なコンサートピアニストとしても何度も最先端技術と関わってきた。その歴史の最初になるのは1986年の夏、ザルツブルク音楽祭である。練習ピアニストとして働いていた私は、ある晩オーストリアのテレビ放送で偶然、290SEの commercials を見た。これはウィーンのベーゼンドルファー社が製造したコンピュータ内蔵のピアノである。カリフォルニアのウェイン・スタンケ氏が開発し、当時ベーゼンドルファー社の親会社であったピアノ製造所キンボールの仲介でベーゼンドルファー社が販売していた。290とはフルサイズのコンサートピアノと同じ奥行き寸法を示し、SEはスタンケの作った電子楽器であることを示す略称である。音を出す仕組みは伝統的ピアノと同じだが、コンピュータ技術による記録装置を搭載していた。各々の鍵盤とハンマーの動きを毎秒800回点滅する光センサーで測定し、打鍵の速度を1018段階のデジタルデータとして記録する機構を備えていた。ピアノという楽器の内部で技術的にどういうことが起こっているかを記録するだけではない。画期的な成果は寧ろ、データを自動演奏として再生できる点にある。演奏中の鍵盤の動きを極めて繊細なニュアンスで再現でき、人間が弾くのと区別ができないほどであった。

この発展の主な用途は2つある。第一にピアノ学習に有益である。ピアニストは自分の演奏を単に録音して聴くよりも、鍵盤の降りる速度等も含めてさらに精密に検証できる。また、さまざまな奏者の比較にも新たな可能性が生まれる。ベーゼンドルファー社は、ショパンの『ノクターン』をマウリツィオ・ポリーニとニキタ・マガロフのふたりにこのピアノで演奏させ、再生した。するとふたりの弾き方や響きの違いがはっきりとわかった。ポリーニの演奏が持つ明晰さは、全ての打鍵が全体の流れの中で的確に位置づけられる、素晴らしくコントロールされた鍵盤の動きから生まれる。一方マガロフの演奏はいわば“即興的”なものであった。不要な鍵盤を押すこともあれば、打鍵の速度にムラもあった。しかしその代わりに、マガロフ氏の解釈は本質的に一層ロマンティックな自由さを帯びていた。幾度となくぼやけた響きになってしまうことがあっても、それによって寧ろさらに音楽としてロマンティックな雰囲気醸し出していたと言える。もし音楽学校にこうしたピアノが備えられたら、ピアノ専攻の学生にとって汲めども尽きせぬ研究領域となるだろう。

コンピュータ・ピアノのもう一つの使い道は録音の領域である。記録されるデジタルデータは、編集プログラムで後から変更することができる。録音中にピアニストがミスをしていてもコンピュータで修正できる。従来のCD録音ではミスをした箇所を弾き直して断片を貼付けて修正した。難しい作品ではしばしばこのようにつなぎ合わせてCDを作っている。しかしそうすると演奏に備わる自発性や表現の一貫性は失われてしまう。コンピュータ・ピアノでは修正はひとつの録音データの内部で済ませられるので、演奏中にピアニストが感じていた雰囲気は損なわれず、生演奏の一貫性が保たれる。演奏会をする段階からコンピュータを使えば、その生録音もスタジオ録音と同等のクオリティに修正してCD化できる。私はこの方法でベートーヴェンのソナタを録音した。

しかし私がコンピュータ・ピアノを使う本当の目的は別のところにあった。話は1986年に遡る。当時私はベートーヴェンの後期ピアノ作品を演奏していたが、『大フーガ』作品134は演奏できな

った。これはベートーヴェンの最後の大きなピアノ作品で、1826年にアルタリア出版社の求めに応じて、作曲者自らが後期の弦楽四重奏曲の中からピアノ連弾用に編曲したものである。私はこの作品をもうひとりのピアニストと演奏してみて、このままの形では演奏不可能だと感じた。ベートーヴェンは、編曲に於いては複雑な作曲書法と過激な声部進行を要求している。鍵盤の上は狭いので“戦士”と化した2人のピアニストが手を交差等すれば怪我をしかねない。またこの作品は、完璧な一つの解釈を必要としており、ふたりの意見の違うピアニストの演奏ではそれは得られないとも感じた。この演奏会の後でコンピュータ・ピアノのことが頭に浮かんだ。『大フーガ』という作品が自ら電子楽器の助けを待望していると考えた。それから私はこの作品を演奏可能にするようなヴァージョンを作り、1987年に私の最初のCDに収録・公開し、1988年にはヨーロッパとアメリカの様々な会場で実際に演奏した。連弾曲だが座っている奏者はひとり。しかしピアニストが座っていない右半分の鍵盤も動いている。まるで幽霊の見えない手が弾いているのかと思わせる光景だった。聴衆は最初こそ驚いたが、最終的には好評だった。しかしながら演奏会場の外では意見は二分されていた。1989年にドイツのシュトゥットガルトで演奏した時、当時の有力政党であった緑の党が「コンピュータ・ピアノは悪魔の楽器であり、これがピアニストを狂わせてしまった」という抗議デモを行った。しかし私の目的はそれとは反対で、ピアニストとして芸術の可能性を広げたいということに尽きた。コンピュータ・ピアノで演奏した『大フーガ』冒頭をお聴き頂きたい。

コンピュータ・ピアノが記録する数値も非常に参考になる。例えば美しいレガートは一つの鍵盤から別の鍵盤へと継ぎ目無く移行することで得られるのではなく、20分の1秒〜8分の1秒間音が重なり合うことで得られる。一つのフレーズの内部で音量の差異が生じることも注目すべきである。普通のピアノが奏でる音の強さを100とすると、旋律を弾く場合の音の強さは70〜150の値に広がる。

さて、このコンピュータ・ピアノのレパートリーを広げるために、私は作曲家に作品を書くことを促してきた。その結果、2つの作品が生まれた。ザルツブルクのルペルト・フーバーとハンブルクのイエンス＝ペーター・オステンドルフが作曲してくれた。特にオステンドルフは『ファン・ベートーヴェン』という、2台ピアノのための画期的な作品を書いた。これは“人間と機械”という二元論を標題音楽風に取り上げ、曲の中で人間と機械を戦わせるという内容だった。第一の部分では、コンピュータの自動演奏が非人間的とも言える正確なリズムと、演奏不可能な難しいパッセージを奏でる。人間が模倣しようとするが拙くしか演奏できない。しかし第二の部分では、人間がベートーヴェンのソナタ作品111の冒頭を引用して演奏する。コンピュータはニュアンス等を完璧に模倣することができず、徐々に人間が優位に立つ。そして第三の部分では機会と人間の間で激しい戦いがあり、人間のピアニストはこの作品を、ためらうように演奏するベートーヴェンのソナタ第一楽章結尾部の引用で締めくくる。これは、ベートーヴェンの作品でしばしば表明された「暗闇を通して光明へ」という思想の魅力的な新しい解釈である。この作品のコンピュータ・ピアノのパートを録音するために、私はさらに電子的なヤマハ製のディスクラビアを用いた。この楽器に搭載された音楽ソフトにより、リズムと音の強さを数量化し、機械による非人間らしさを際立たせた。

先に申し上げた『大フーガ』と2つの現代作品、ベートーヴェンの作品106や111、または作品120のディアベリ変奏曲のようなソロ作品を連ねることで一つの演奏会のプログラムが出来上がった。1980年から1995年までの間に、私は何度もこのプログラムで演奏した。しかし1995年以降はこの演奏活動が続けられなくなった。理由は、コンピュータ・ピアノの価格が通常のピアノの2倍もするのでスタジオや学校が買ってくれなかったことである。後にコンパクトな機種も出たが、購買力のある個人でも、これを買う人は少なかった。2つ目の理由は、当時この楽器を置いてある、革新的な演奏に興味を抱いている研究機関を訪問し尽くしたということである。そして3つ目には、運搬に費用がかかる。ペーゼンドルファー社がこの費用を負担してくれたのも始めのうちだけだった。

私は、1994年に長期にわたるプロジェクトを始めた。ベートーヴェンのピアノソナタ全部をコンピュータ・ピアノでCDに録音することであり、今も続いている。1994年にウィーン楽友協会のブ

ラームス・ザールで、32曲のピアノソナタ全てを、ベーゼンドルファーのSE コンピュータ・ピアノで演奏するチクルスをした。このときの録音を、先述したスタジオ録音の品質を持つ生演奏として仕上げ、市販したいと考えている。しかし編集作業に時間がかかり、CD販売を引き受けてくれる企業もなかなか無いので、これまで2枚出したがあと6枚がまだ残っている。ウィーン音楽大学での仕事も増える一方で、大学を退職するまで待たなければならないだろうが、ライブの雰囲気や損なわずに完成度の高い録音ができるということは、既刊のvol.1をお聴きになれば確信して頂けるだろう。

本日の最後の話題は、最初に触れた、今年の3月に電子ピアノで演奏したベートーヴェン第3コンチェルトについてである。ヤマハの電子ピアノであるアバングランドと、エレクトーンという電子オルガンは、ベーゼンドルファーのコンピュータ・ピアノとは全く別の課題を持っている。エレクトーンでは音は電子的に加工、蓄積され、再生もされる。新しい音を生み出すこともコンピュータで行っている。アバングランドもエレクトーンも、オリジナルの音は既成楽器からサンプリングによって取り入れられ、それを鍵盤を押すことで電子的に呼び出している。今年の3月に、エレクトーンは既に50年に渡って発展を続け、音楽大学でも専攻できるようになっていると知って驚いた。ヨーロッパではこの楽器は知られていない。この楽器をオーケストラの代わりとして指揮の勉強に用いるのは、ヨーロッパ人にとっても多に有意義だと思われる。ウィーン音楽大学のような、少数の大きな音楽学校だけが指揮者のためにオケを用意できる。しかし大抵は2台ピアノでオーケストラパートを演奏している。2-4台のエレクトーンなら実際のオケに近い響きをもたらしてくれる。

オリジナルの響きの模倣ということでは、エレクトーンの音色に違和感を覚える点もあった。エレクトーンのフルートとクラリネットは本格的に響くが、オーボエやファゴットは人工的な印象があった。私自身が演奏したアバングランドの電子ピアノは、響きの質では問題を感じなかった。再生される音色は素晴らしく高い水準に達している。鍵盤の感覚もオリジナルに非常に迫っている。驚いたのはゆっくり打鍵しても内部のハンマーがスッと離れる感覚を得られたということだ。アバングランドは、ピアノという楽器に対する現代の電子楽器が可能な限り接近した成果である。

しかしコンサートピアニストである私は伝統的なピアノとその可能性に親しんできたので、その立場から見解を述べたい。いくつかの状況では腕の重みかける時や横に移動する時の感覚が、自分が普段ピアノを弾いている時とは違っていた。特にレガートを演奏するのは難しい。恐らくそれは、レガート奏が完全なアナログ的な動きのプロセスを必要とするからだろう。レガート奏法は上手に腕を横に動かすことで可能になるからである。ダイナミックに関して、鍵盤の反応は素晴らしいのに演奏中思うような音を出すことができないと感じたこともあった。見えないカーテンが楽器と自分の間にあるようだった。また、ゆっくりした静かなフレーズを弾こうとした場合適切な反応が得られず、思った響きに到達しないと感じた。アバングランドのダイナミックの反応は、非常にゆっくりと鍵盤を押した場合、明らかに伝統的なピアノが示す反応とは違っていた。

しかし将来これらの難点は改善されるだろう。総合的に言えば、今年3月のピアノ協奏曲の演奏は、



メーカー教授（左）と野口剛夫会員（右）

現代の技術の世界への心ときめく旅立ちであった。それではそのときのライブ録音から、第二楽章をお聴き頂きたい。この演奏が終わった時に私は、新しい技術の発展が空虚な独りよがりの追求ではなく、私たちを結束させる一層高い目的に寄与するものだと感じた。大切なのは、音楽として、芸術として、できる限り高い表現を求めるということに、技術的成果が貢献するのでなくてはならないということである。

ご清聴に感謝します。

パネルディスカッション-I

テーマ「ハードからみた電子オルガンの新たなる側面-II」

ー演奏の現状に対する課題と提案ー

報告：海津幸子

パネリスト

和智正忠（元ヤマハ(株)取締役） 三枝文夫（(株)コルグ取締役） 森下絹代（昭和音楽大学）
司会・進行：柴田 薫（昭和音楽大学） 記録：海津幸子（昭和音楽大学）

パネルディスカッションIは、昨年の審議概要の説明の後、各パネリストによる発表、ディスカッション、まとめの3部構成で行われた。

第1部 パネリスト発表

和智正忠氏より、電子音について次の様な話があった。

電子音はデジタル化により発展したが、その情報量はアコースティック音に比べて非常に少ない。電子音は音の出力機構をモデル化して情報量の圧縮を行っており、この圧縮が人間の感覚に影響したレベルで為されているためにアコースティック音との比較において感覚を損なうこととなる。しかし、音の感覚を損なわずに伝えられなければ何も出来ないというわけではない。現在の電子音でも多くのことが可能であり、全体を認識した上で電子楽器をうまく活かすことに目を向けることが大切である。その一方で圧縮量を減らし、情報が入力から出力に一貫して伝達されるような技術発展にも期待したい。

次に、三枝文夫氏より、電子キーボードとその音について次の様な話がなされた。

かつての電子キーボードは、その機構から鍵盤数に比例して経費が倍増したため、音質が低いのは致し方ない状況だった。一方で、複音楽器であるキーボードからあえて和音を排除し、モノラル発音で音質の向上を目指した機種もある。電子楽器と従来楽器の音の差は、音エネルギーの源の差である。従来楽器は人間の動きによるエネルギーが源となっているが、電子楽器のエネルギーの源は電気であり、その流れの強さや回路をコントロールすることで楽器として機能している。またコントロールという面でも電子は便利なツールであり、エネルギーの強弱の差を人間の感覚とマッチさせることも、その逆転の発想も可能なのである。電子音は、各音色を取り出して議論されることが多いが、従来楽器と同様に演奏や音楽することを通して音色を考えてみてはどうだろうか。

森下絹代氏からは、電子音の捉え方について次の様な話があった。

演奏者にとっては音楽に対する自分のアプローチの仕方が問題であって、楽器自体の問題に目を向けても何ら益することはない。古い機種から最新機種に至るまで、音楽をするという気持ちは何ら変わることはない。どんなに良質の音であっても音単体では音楽にならず、音楽とは前の音、今の音、次の音の繋がりによって命を持ち、音楽たるものとして存在するからである。楽器にとって音質の向上は必要だが、たとえ音質が多少低くともフレーズの作り方や全体の流れ等、要求される性格をどう表すかで音楽として成立するはずである。メーラー氏より電子ピアノにおけるレガート表現の難しさが指摘されたが、電子オルガンにおいてもレガートの表現は難しい。ビブラートやリバーブを駆使することでレガートを物理的に助けつつ、一つ一つの音のエネルギーを音の長さ、大きさ、楽器の持つ

特質等の観点から考察し演奏してはじめて音楽的なレガートを得ることができる。単体の音としてではなく、音楽としての音を追求していきたい。

第2部 ディスカッション

佐藤：音楽を提供するプロデューサーの立場として、聴き手に電子音が心地良く受け入れられ、なおかつ電子楽器の力を発揮した電子楽器独自の表現を目指したいと考えているが、楽器を開発する立場としてのデジタル音源の開発時の音色の選択の仕方、音色作りにおけるポリシーをうかがいたい。

和智：楽器にはそれまで歩んできた流れがあるため、演奏され教育の場で使われてきた音色や機能等の条件を満たす必要がある。また、コスト面を無視しては実現の可能性がなくなってしまう。その上で、新たな可能性への挑戦がある。

森崎：電子ピアノにおけるタッチやレガート奏の問題が指摘されていたが、演奏者のそうした違和感とは、基準となる楽器や奏法があり、それと比較する為に感じられるものではないだろうか。電子キーボードを演奏する時、それはそれとして享受できないものなのだろうか。電子楽器ではアコースティック楽器では不可能なことも可能となり、人間の感覚として違和感があることも実現可能となったが、どこまで許容できると考えているか。

森下：音楽的要求が高いほど、それに応えられる演奏を求める過程で一つ一つの音の不備に敏感になる。その中で一つのセンテンスとしてどの様に何を言わせるかと考えると、演奏の流れとしてカバーできることは多い。楽器を知った上でこの表現で良いと思うのだが、すべてを受け入れるのではなく、あくまでも表現に相応しい音を追求したい。

三枝：シンセサイザーにおいては、雑音だらけで不安定、ひずみが多い音であるにもかかわらず、40年前の楽器の音に魅力を感じる人が多く存在する。それはその楽器独自の音を持つがゆえに起こる現象で、電子楽器もヴィンテージ化していると言える。オンドマルトノは従来楽器の模倣は出来ないが独自の個性を持ち、テルミンは当初その音色に関して賛否両論あったにもかかわらず独自の価値を持った。

和智：演奏者が音楽表現をする時、演奏者と聴衆の間でいかに思いが伝わるかが大切であり、楽器として望まれることは演奏者の要求を満たす楽器であることである。

メーカー：電子ピアノは機能や音色に関しては非常に高い水準にあるが、実際に弾く者の感覚には食い違いが感じられ満足できるとは言い難い。ピアノは減衰音によって表現するのでレガートには本質的な難しさがあり、歌うようにレガートを奏することは常に大きな課題である。ピアノにはメーカーによる差異はあってもピアノの範疇を出ない共通の感覚があるが、電子ピアノにはまだまだ研究開発の余地があると感じている。

中島：電子楽器では何ができて何ができないかということを開発者はもっと発言しても良いのではないか。在来楽器のリアリティを追求することも大切だが、自分の音を求めていくという方向にもっと価値を見出し、アコースティック楽器では不可能なことを電子楽器として積極的に考えて行くべきではないだろうか。開発・演奏・作曲と立場の異なる人々が楽器について語り合い、具体的なイメージが描けるような環境を作ることで、可能性はもっと広がるのではないかと。

柴田：電子音への広いニーズをメーカー側がどのように受け止め、それらが製品にどう活かされているかをうかがいたい。

和智：演奏家から音楽表現を実現させるための機能や音色について、教育者から現場でのニーズに関して意見を収集し開発に活かして来たが、今日から見ると狭い世界での活動であった。本学会のこのような場は、閉塞感から脱却し広い議論が出来るチャンスに繋がっていくと思う。

三枝：近年は商品化のサイクルが非常に短期化しているため、演奏家の意見をすぐに活かすことは、

難しくなっている。また、楽器の場合は好みの問題もあり様々な意見が出るのだが、正反対の意見を平均化すると魅力がなくなりその商品は売れない。本学会のこういった場を重ねることで本質的な意見が出されるとよいと思う。難しい

金銅：メーラー氏が演奏した電子ピアノは、ヤマハが次の世代のピアノとして考案した楽器だと受け止めている。様々なピアニストの意見を取り入れつつも、これからの天然素材が入手しづらくピアノ製造が困難になる時代に対応しようとしていると感じる。その形状は技術的には自由なはずだが、ピアニストのこだわりを尊重したための形状である。アコースティック楽器とかなり近い存在であり、なおかつ境界を超え、境界が存在しない様な楽器として開発された印象を持つ。我々にはアコースティック楽器と電子楽器の区分があるが、将来的にはその区分はなくなるのではないかと。その時にこの電子ピアノが5音色しか持たないことはキーポイントとなる。電子オルガンは多数の音色を持つが、個々の音色にこだわるためにアコースティック楽器の音色との差が問題になる。楽器として音色のターゲットを絞り込みその楽器のイメージを作り上げることで、何か到達点が見えるのではないだろうか。

まとめ

柴田：楽器に対してユーザーと作り手の意見交換がなされる時代となったが、これらの意見をどう発信していくかが次なる課題である。学会として発信したことを企業はどのように受け止めるのだろうか。

三枝：ユーザーとの意見交換の機会が多いが、その場での意見交換を一般論として拡張することには危険もある。このような教育関係者とはどのような関係を構築していくべきか模索中。勿論、この場での意見はおおいに参考にしたい。

和智：ヤマハでは従来から開発時点でプレイヤーとの共同作業がなされていたので、本学会会員のプレイヤーの方々の仲介でこの場での意見を吸い上げ、ヤマハに伝達するのがひとつの道筋ではないだろうか。また企業の賛助会員も儀礼的なものではあろうが、意見交換が企業にとってメリットある場として機能して行くことは可能かと思う。

柴田：2年間にわたり「ハードから見た電子オルガンの新たな側面」というテーマで、電子オルガンに限らず電子キーボードに話を広げて考えてきた。これは今後発展して行くためのものであるが、ここ数年我々自身も変わって来たように思える。かつて抱いていた楽器のモデルチェンジに対しての負の気持ちだが、むしろそれを必要善として認め、いかに活用するかという方向に向いて来ているように思う。それは本学会で継続して話し合いを進めてきたことの成果であり、これらを次世代に向けて発信して行くことを考えると、この学会の存在価値は大きいと再認識させられた。

パネルディスカッション II

テーマ「ML 授業のためのテキストを考える II」

～伴奏付けや鍵盤楽器基礎技能などを中心に～

報告：西山淑子

パネリスト：柳田孝義（文教大学） 赤津裕子（竹早教員保育士養成所） 脇山 純（平成音楽大学）
司会・進行：森 直紀（昭和音楽大学） 記録：西山淑子（昭和音楽大学）

司会：昨年と同じテーマで行う。昨年は、「テキスト・教材をどのように使うか、ML の効果的な使い方などの情報を学会として発信して行くという形で提案して行こう。」ということでまとまった。今年は、これを踏まえ、さらに発信、提案をどのように進めて行けるか、検討したい。

パネラー発表

柳田孝義パネラーからは、文教大学における音楽専修生を対象とした授業方法が紹介された。

1. ML 教室の設備について。2 部屋のうち音楽専修生が使う部屋は、16トラックのオーケストラを想定した楽器群のあるキーボード（15 インチのディスプレイ付き）30 台、大型スクリーン 2 基、2 つのメインスピーカーと 4 つの小型スピーカーでサラウンド効果を備え、電子キーボードでもアコースティックな音を身近に感じられるよう配慮されている。
2. 専攻は教員養成であるが、教員として、音楽科と変わらない知識が必要であるので、内容もそれと変わらないスタンスで行っている。
3. 楽器学と編曲法を一緒にすることで、楽器 1 つ 1 つの特性などを学ぶだけでなく、編曲もさせて音の重なりも実際に音を出して体感させる。こういったことは、教員になった時、現場で非常に役に立つ。ML だからできる授業である。
4. その他、和声、対位法、ソルフェージュなどさまざまな科目を融合させた効果的な授業が可能である。
5. サンプリング音源を使うことで、倍音の含まれ方などかなり進化したが、まだまだリアルでないものもあるので、今後の発展を望む。

赤津裕子パネラーからは、幼稚園教諭、保育士養成の現場で、特に純初心者を対象にした、ML を使ったピアノ演奏技術や伴奏付け（今年から始めた）の指導が紹介された。綿密に計画された授業内容で、学生へのきめ細かな対応がなされている。

1. 学生のうち半数以上が初心者～純初心者（バイエル 50 番以下）。この傾向は年々増加している。しかし、2 年間で必ず力をつけて、資格試験に合格するように引き上げて卒業させる。そのため、授業終了後毎回、担当の先生 3 名が集まり、一人一人の状況を報告し、対処方法を検討している。
2. 1 年終了時で遅れを取っている学生の問題点＝①譜読みができていない ②指が動かない ③試験で弾けなくなってしまう④楽しむレベルに達していない⑤練習方法がわからずついつい練習しない＝の解決策として、①学習の目的をはっきりさせる ②バイエルをレベル別に類別して、曲数をしぼる ③実際の現場で役立つ曲を見つける、の 3 点を挙げる。
3. 1 回 90 分の授業を 5 つの柱＝読譜・指の練習・課題の発表・主活動・宿題の説明で構成し、相互の関連性を理解させる。前期試験でバイエル 85 番、後期でバイエル修了と、具体的な目標を提示することで、きちんと練習ができ、完成度アップに繋がった。そして、ピアノを嫌いにならないう、確実に力がついていることも実証できている。また、個人レッスンでは一人 15 分だが、ML だと 90 分間、楽器（音楽）と関わることができる。

脇山純パネラーからは、昨年につき、ノートーションソフトを活用した授業の具体的な方法が紹介された。

1. テキストと授業の流れ

自作テキストが無駄がなく一番良い。労力がかかるが、それだけの効果はある。毎回 A3 用紙の半分にその日の授業内容を書き、半分は、授業内で書かせて提出させる。これによって、理解度がよくわかり、次のフィードバックにも繋がる。

2. 複数ソフトの利用

ノートーションソフト（フィナーレ、シベリウス、ロジックなど）の他、DAW（音楽制作ソフト）やエクセルなども活用している。さらに、事前にビデオ撮りして、先生の手元が見えるように、動画も用いている。その結果、①色々な見せ方が可能になり、面白く提示することができる、②板書の時間を削減できる、③視覚、聴覚、触覚を総動員させ、感覚と理論の両方向から理解させられる。学生はたくさんの音楽を聴いているので、体にはいい音を持っている。それを引き出す手伝いというスタンスで、学生の成長を楽しみに、情熱を持って工夫している。

3. ML のメリットと今後

大勢の仲間のアイデアを共有することができる。将来、電子教科書やクラウドコンピューターの実用化を期待している。

ディスカッション

柳田→赤津：卒業後のフォローはされているのか？

赤津：現場（幼稚園、保育園）で実際にやってみて、もっと勉強したいという卒業生がレッスンにくるといようなケースが時々ある。就職先でレッスンを受けさせてくれているところもある。

柳田→脇山：受講している学生の専攻は？

脇山：音楽学科（様々な楽器の専攻生）とサウンドデザインといろいろ。

柳田：学生は独習をしているのか？

脇山：予習復習はしないことを前提に、授業内で完結しているが、クラウドコンピューターが実用化されれば、独習もやり易くなるだろう。

柳田：以前に Web 上で授業をしたことがあるが、音としての実感がなく失敗だった。音楽はやはり対面でないとまずい。その点、ML システムは良い。

赤石：伴奏付けをやっている所はありませんか？

赤津：2年でやっている。

脇山：リズムと連動して、ジャズっぽくするというようなことは、少し脱線してやっている。

森：昭和音大では『鍵盤ソルフェージュ』で、弾き歌いや伴奏付けを行っている。初級・中級・上級にグレード分けしている。

赤石：初級・中級・上級の具体的なレベルはどのようなものか？

西山：初級は、コードネームを覚えるところからはじめ、主要三和音と副三和音およびコードネームがすぐつかめる。中級は、さらに副属七、dim. も和声感と連動してわかる。上級は、より音楽的に弾けることを目標にしている。

まとめ

森：各学校でなされているさまざまなノウハウ（教材とその運用、指導法、ソフトの使い方など）を収集、蓄積し、発信してゆくという作業を具体的に進め、ディスカッションの成果を出して行きたいので、協力をお願いしたい。

ラウンドテーブル

テーマ「生涯学習における電子キーボード教育の現状と可能性を探る」

報告：小沢真弓

参加者（12名）

A.阿方 俊（司会進行） B.影山建樹（報告・アドバイザー） C.小沢真弓（報告・書記）
D.柏村 治（昭和音大） E.程 松野（聖徳大） F.古田政伸（横浜アオバ楽器） G.宮本賢二郎（浜松学芸高校） H.安藤恭子（鷺谷高校） I.松本裕樹（和歌山市公民館） J.仁田悦郎(l-moa 音楽教育研究所） K.岩崎 薫(ヤマハ株） L.五十嵐 優（昭和音大生）

1 現状報告

- ① 清見潟大学塾の15年の生涯教育の歩みと電子キーボード 清見潟大学塾 影山建樹
26年前に静岡県清水市が設置した公設民営の生涯教育機関。静岡市と合併後完全民営。講師数100人。受講生は3000人。独自の開講・募集方法は注目されている。電子キーボード講座は人気で長期にわたり開講。
- ② 市川市における音楽福祉活動と伴奏者養成講座について
NPO 法人歌のボランティア*いちかわシャンテ 小沢真弓
2004年に活動開始、2008年NPO認証。会員数約100人。現在、市川市を中心に約11の高齢者施設を定期訪問し唱歌童謡をともに歌う。この活動で施設で導入しやすい一段電子キーボードに着目。メロディ主体の自動伴奏を利用した「伴奏者養成講座」を開講
伴奏ボランティアの獲得の効果とともに問題点も明らかになった。
- ③ 昭和音楽大学生涯学習センターのシニアを対象とした楽譜を用いない鍵盤導入の試み
昭和音楽大学 阿方 俊
昭和音大で実験的に行ったシニア向け初心者講座。楽譜を使わず独自の「図形テキスト」を使用。
将来電子オルガンに結び付けられるようにコード伴奏を導入
受講生の年齢は60～80歳中心。受講後のアンケート報告。秋に第2弾を予定している。

2 ディスカッション

- A 電子オルガンやM.L.の研究に比べて一段電子キーボードの掘り下げが足りない。この電子キーボードの位置づけをはっきりさせたい。当学会でもシニアに目を向けてみようではないか。ここはラウンドテーブルとして、自由に建設的な意見を言いあう場にしたい。
- D 生涯教育に問題がある。かつて音楽教室に行ったことがあるが長続きしなかった。公的機関がやるか、民間がやるか、ビジネスとして成り立つか等々、目的がはっきりしない。(③に関して)楽譜なしを奨励するのか？
- J 生涯教育と生涯学習を区別すべき
学び手の論理が生かされるのが生涯学習。教える側の論理が生涯教育
子どもの場合、基礎から作り上げる学びが中心だった。シニアはやりたいことを優先させるうちに基礎的な勉強の必要性を感じるようになるのではないかと。生涯教育という概念を捨てるべきであろう。
- A ③では図を使ったが思いがけず読譜の導入になっていった。シニアに対する生涯学習の存在意義としては、医学的側面や社会性に加えて社会貢献といったものがある。

- B 清見潟塾は学校教育でも訓練施設でもなく資格獲得のためでもない。生徒がやめていくのは講師が悪い＝おもしろくないからというスタンスであり、私たちは、指導者自らが生徒を集め、10人に満たないと学級閉講し、報酬も講師次第となる。
- C 楽器メーカーにはシニアに目を向けた機種をつくらせて欲しい。現行機種では搭載される機能は若い人向きでシニアには使いにくい状態が何年も続いている。
- A 使っている人、教えている人の声がメーカーに届いていない。この学会から発信していきたい。
- B 電子キーボードは基本的には同じ。細かいところを指導するのが指導者のつとめしかし、やはり持ち運びには重い。メモリーもほしい。
- G 5線の楽譜を使わないのであれば、大正琴やハーモニカなどどっちがうのか？メリットを明確にしなくてはならない。
- I 公民館で働いていた時の体験から、報告③の楽譜なし、アンサンブルをも加えたキーボード導入に感銘した。
- F 一段電子キーボードがメーカーによって違うことをここではじめて知った。標準仕様をもうけたらどうか？
- H 音楽の好きなシニアがたくさんいるのだから、生涯教育として一つの分野ができるのではないか。
- K メーカーとしてもっとたくさんの人の意見を聞きたい。5000のヤマハ教室の中で生涯学習を実施しているところは少ない。午前中の空き教室活用の可能性も考えられる。
- A 新しい組織を発展させるために3つのモノ「わかもの」「よそのもの」「ばかもの」が必要とテレビでいっていた。よそのものとは、教育者だけではだめ。(今回のように多岐にわたる参加者が望ましい)。ばかものとは、信念に基づいて行動を続けられるもののこと。
この「生涯教育の中における電子キーボード」を、電子オルガン研究、MLに続く新分野として育てていきたい。

ランチタイムミーティング

電子キーボードを活用した地域での音楽活動

担当/記録 森松慶子

ロビーにてオーヴァーランチ・ディスカッション及び視聴覚資料を参照しつつ情報交換

話題：参加者それぞれの地域での活動に関する自己紹介

よさこいオリジナル曲の依頼について、経験者と初めての人との間で情報交換

演奏、録音に使用する機器に関する情報交換

その他、ざっくばらんな雰囲気ですぐに親睦を深められる良い時間となりました。

今後の取り組み：めいめいがそれぞれの地域で個別に行っている音楽活動の情報を共有し、互いのノウハウを教え合ったり、“元気”や“活力”を分かち合ったりしやすい環境を作っていく。ゆるやかなネットワークづくり。

●Twitterを活用してみる(試行中)：それぞれが地域の中で電子キーボード楽器を用いた楽器店や企業主催等でない音楽活動を行う際、その概要を「つぶやいて」、末尾にハッシュタグ(半角スペース+JSEKM)をつける。うまく機能するかどうか試行中。目下ランチタイムミーティングの出席者を中心に少人数で試しているが、いずれ広くよびかけ、不特定多数の情報を吸い上げられる窓口とし、電子楽器の市民レベルでの活用的一端でもかいま見られれば、と考えている。また、Twitterの特性を利用し、特定の枠組みにとらわれないゆるやかなネットワークでの情報交換を促せば幸いである。

研究発表① 電子オルガンの社会的認知 ～その課題と問題点～

安井正規（電子オルガン奏者）

発表者の安井正規氏はフリーの演奏家として、メーカーの傘下のもとではなく、一般社会の中の様々な分野で活動されている。本発表では、日々の活動の中から「電子オルガンの社会的認知」に向けて、現在の電子オルガンが持つ課題を概観し、検証した上で、忌憚のない意見を述べられた。

最初にごく自然に電子オルガンが一般社会の中に溶け込んで、音楽を共にする姿が映し出された。一般社会の中では、電子オルガンの評判は良好であり、むしろ音楽を専門とする人々の中では、買い換えの問題、複雑な操作性、電気＝機械、何でも出来てずらい！？等の比較的否定的な厳しい意見を聞くと語っている。

電子オルガンは、音質や機能や操作性が向上する一方で、市場規模が縮小している。その理由として、電子オルガンがメーカーごとに登録商標で販売され、普及されてきた今までのシステムに寄るもの、また最新機種を前提として他社メーカーとの性能差を議論し、ソフト・ハード共に旧モデルを切り捨てるという歴史の繰り返し等が挙げられた。このクローズドシステムについて、その閉鎖性を解放し、国家試験・国際規格といったオープンなシステムの構築が望まれ、またグローバルスタンダードを目指すには携わる人々に意識改革が必要であり、電子オルガンのアイデンティティにこだわりすぎると一般社会から隔離されると述べている。

テクノロジーの変化は芸術という分野も例外ではなく、時代の移り変わりにより役割が変わってきた。アコースティック楽器が果たしてきた役割は電子楽器が受け継ぐ時代になっている。アコースティック楽器が対応できない場面も電子楽器が果たしている。発表の結びとして「良い音楽を提示するだけでなく、今の社会における電子楽器の重要性を一般社会に発信していく必要がある」と述べられた。

本発表を聴きながら筆者は発表者の並ならぬ電子オルガンへの愛着と愛情を感じた。このような現場で電子オルガンに携わる人々の「声」が電子オルガンにまつわる世界全体に行き渡り、反映されることを願って止まない。

研究発表④ 映画音楽作曲における電子オルガン音源使用の優位性

～映画『日本のいちばん長い夏』の音楽制作を通じて～

小熊達弥（サウンドインターフェース）

本発表は発表者が2010年3月に完成させた映画『日本のいちばん長い夏』に基づいたものである。5.1Ch. 3Dサラウンド仕様で発表者自身による作曲、音楽制作、音響制作を行った作品である。その際に発表者は電子オルガンを最大限有効活用している。発表はスピーカーを実際にサラウンド体感出来るようにセットし、映像を見ながら行われた。

監督からの要望は、歌：ちあきなおみ、曲：戸根一郎による『星影の小径』を指定し、そのメロディーを元にこの曲の劇伴風オーケストラアレンジを映像に当てる事というものであった。それは中

編成オケサウンドのレジストで即興演奏により行われた。電子オルガンに携わっている人においては、その曲時間分で創り上げることが出来るという即興能力を持ち合わせており、また監督、プロデューサーに向けての試聴プレゼン音源を作ることができる。発表者は、そこに電子オルガン音源使用の優位性が存在すると論じており、その音楽能力自体が素晴らしい、ということを強調されていた。

また、即興的な演奏に加え、表現においてもより豊かなニュアンスを具体的に音により示すことが出来る。生楽器の奏者にも良い演奏で聴かせれば譜面に書き表す以上の指示が出来、それに対応してくれて良い演奏を得られる、と述べられた。

そうして得た演奏をさらに、電子オルガン各パートをプロトウールズにマルチトラック音源として立ち上げ、それに生楽器（ヴァイオリン、ビオラ、オーボエ）の演奏を録音、高精度のMIXを行い映像データと合体、今回は5.1Ch. 3DサラウンドMIXまで至った、とのことである。

電子オルガンという楽器の素晴らしさはもちろんであるが、それ以前に、電子オルガンに関わる人達は一人役もこなせるわけであり、その人達が電子オルガンによって培った様々な音楽能力を最大限に活用し、花開かせていくということが発表者の希望するところであり、御自身も頑張っている、と話された。発表の中で流れていた音はとても心地良く、その音は、電子オルガンという一台の楽器と一人の音楽家から発され、ここまで広がるということを実感できる発表であった。

研究発表⑦ アンサンブルでの電子オルガンのピッチとエフェクト

森松慶子（音楽ライター・電子オルガン演奏/指導）

発表者は弦、管楽器奏者や声楽家等の生楽器とのアンサンブルをする場合に、自分が演奏する電子オルガンの音と他の奏者の出す音とが溶け合っていないような違和感を持っていた。それはピッチとエフェクトに関する音作りの問題である。解決方法を見出すためにある方向で試行錯誤を繰り返し、その後考えの方向を転換するに至る経緯が、その時々リアルな思いと共に述べられた。

発表者は音作りとして、より抜けの良い効果的なサウンドを作るためのピッチとエフェクトに関するノウハウを駆使するなどの『デフォルメ』的な音作り、リアリティを追求した音作り、異種楽器や声楽とアンサンブルする際の地味で無難な音作り、と分類している。電子オルガンが楽器として新参者であるが故に、問題は自分側にもあるであろうと無難で遠慮がちな音作りをする形で解決していたが、それは抑圧的な感覚持ち、また音色を地味にすると連動して演奏も地味になる、と述べている。しかしピッチをずらす等の電子オルガンの鳴りを良くするために施されている方法こそがアンサンブルにおいては邪魔になるのではないかと考え、そのことを検証するために、アンケート調査が為されている。

そんな中、内海氏の音作りにおいて、ご自身とは方向性とレジストレーション観自体に違いを感じ、氏に話を聞くと、どのような場面でも基本的に自分のスタイルを変えない、と予測とは反対の内容であった。それをきっかけに、遠慮なく自分の個性や特徴を発揮してアンサンブルをすることができるなら、そちらにシフトしたいと考え直したということである。アンサンブルを成立させるために、事前に言葉で電子オルガンとしてのスタンスをしっかりと伝え、十分にコミュニケーションを図ることである手応えを得たようである。そこではとまどいや遠慮を捨て、説明する勇氣と語彙を備えていくことが必要と述べている。

ピッチの問題は演奏する上で避けては通れないが、筆者自身も今後他の楽器の演奏家と向き合う時の姿勢を正された気がした。この発表は先のアンケート調査結果も含め、電子キーボード研究 Vol. 5 に論文としてまとめられているので、是非ご一読いただきたい。

研究発表② 生涯教育における清見潟大学塾の活動と今後の課題

影山 建樹・望月 慎也 (清見潟大学塾)

本発表では、まず清見潟大学塾の理念や実態についての紹介がなされた。教えることを自らの生涯学習と考え、応募した100人ほどの市民講師陣が年によって変動はあるが150程度の講座を開講し、そこで学ぶ塾生の数およそ3,000人といういわば「大学ごっこ」のような学び合いの場が清見潟大学塾であるという。そうした講座の一つとして、キーボードを学びたいという受講者のための「キーボード講座」を開設し、電子キーボードを活用した活動の実際が語られた。ここでの理念が「学習者の学びたいこと」の実現にあること、またシニアのまったくの初心者にも手厚く寄り添うためには、それぞれの学習者のレベルに合わせてフレキシブルに個別対応することを重視していることも述べられた。中には交通事故で失ってしまった身体の機能を回復させるためにキーボードを練習することを思い立ち、この塾で学んで演奏技術のみでなく、身体機能が回復するといった成果を上げている例なども発表された。そのような多様な塾生のニーズに対応したキーボード練習の指導をする中で、何よりも塾生自身の「心の支え・癒し」や「前向きな姿勢をとり戻す」ことに音楽活動が役立っていることが多くの事例を通して聞き取れた。

そのような音楽活動を通して、塾生の中には他の楽器にも取り組みたい、自分の孫にも教えて欲しい、演奏だけでなくシーケンサーで音楽づくりをといった要望も生まれるなど、自ら広がり求めて動き出す様子も語られ、生涯学習社会の中で電子キーボードがもたらす好ましい影響や意義について語られ、今後電子キーボードについて考える上多くの示唆を含んだ内容の発表であった。

研究発表⑤ 福祉活動と電子キーボード

～唱歌ボランティア伴奏者養成講座からの提言～

小沢 真弓 (NPO 法人歌のボランティア
※いちかわシャンテ代表)

本発表では、唱歌ボランティアの活動の紹介がなされ、市川市を中心として高齢者施設を訪問し、昔歌い慣れ親しんだ唱歌や童謡を施設の利用者であるお年寄りに聴いてもらうだけでなく、音楽療法的な手法も取り入れた参加型の活動を展開している団体であることが述べられた。

そうした活動の中で、伴奏者の育成と確保が大きな課題となったことから、伴奏者養成講座を開設し指導を実践する中で生じた実感や考察をもとにした提言である。

伴奏を担当するのは通常ピアノなどの鍵盤楽器であるが、お年寄りに進んで歌に参加してもらうためには、キーを低く移調して演奏する必要があることから、即座に移調して演奏する技能が必要であることも語られた。電子キーボードは、そうした移調を容易にする機能としてトランスポーズ機能を有していること、しかもピアノやオルガンといった据え置き型の楽器と異なり、軽量・小型であることから搬送にも便利、広い場所を必要としないというメリットを持つことに着目して大いに活用しているという。中にはカラオケ機能を備え、マイクロフォンを接続することもできるものもあり、拡声設備のない施設では便利に使えるなど、こうした活動に電子キーボードは最適であり、「何かの代わり」の楽器としてではなく、電子キーボードだからこそ適しているのだという指摘もなされた。

とりわけ電子キーボードの持つ自動伴奏機能は、主旋律が弾けコードのルートさえわかれば伴奏を奏することができることから、伴奏者養成講座にも抵抗なく参加して、自身の趣味を福祉活動に広げていく様子も語られ、これも電子キーボードだからこそだと主張。

その上で、電子キーボードは安価でも多機能な機種が多く、また同じ機能を異なった名称で呼んだり操作方法に違いがあるなど、シニアが安心して触れることができにくいといった問題点も指摘し、より有効に活用できるようになるためのメーカー側の理解も求めたいとするなど、具体的・現実的な視点に立った現場の思いが熱く語られた。

研究発表③ アメリカ・イーストマン音楽学校の M.L.教育分析

西山 淑子 (昭和音楽大学)

本発表は、本学会でもこの2年ほど M.L.の領域で大きな研究課題として指摘されている学習テキストに関する研究発表である。テキストを作成・編纂するにあたって、どのような内容・構成が望ましいかを探る調査・研究の過程で入手したアメリカ・イーストマン音楽学校のテキストについて、その内容を分析・検討した結果の研究報告である。

このテキストは、基本的に鍵盤楽器の初心者を対象として行われる M.L.によるレッスン (クラスピアノと呼ばれる) に供される “KEYBOARD MUSICISANSHIP” と題されたテキストである。綿密に細心の注意を払ってプログラミングされたこのテキストの使用にあたっては、主任教授の統括のもと、実際の指導にあたる 10 名の Teaching Assistant に対する研修 (M.L.の基本的な考え方や指導法、使用法等について) を行って実践に供されるもので、学生は2年の必修期間に BOOK I、BOOK II の内容で学び取ることができるように仕組みられたものであるという。

実際の学習場面では、スクリーンに映し出されたテキスト内容の譜面やどの鍵盤を押さえるかが示される鍵盤図などを併用し、視覚的にも理解しやすいシステムをとると共に、主任教授による授業参観及びディスカッションによる指導法の確認などにより、指導法の統一も図られているということも含めて実践の様子等がビデオで報告された。

また、このプログラムの中では定期的なテスト以外にプロフィシエンシー・テストと呼ぶ学生の自己申告によるテストもあり、学生は達成感を味わいながら学習できるよう意図した配慮もなされてい

るという。

テキストの内容は、セオリー、曲、テクニック、分析、和声、移調、即興。作曲といった要素で構成され、とりわけ移調や即興を重視し、伴奏付け→アンサンブル→作曲といった「学習者が音楽に創造的に働きかける作用」を大切にして、包括的な音楽力の育成を期したものとなっており、本学会のこれからの研究に大いに参考になるであろうと印象づけられた発表であった。



イーストマン音楽学校のマユミ・Mazen 先生による M.L.授業

研究発表⑧ 電子オルガンアンサンブルの課題と今後

ーイスメ世界大会 in 北京での演奏を通してー

梅都優子（しょうわジュニア・オーケストラ）

本発表では、第29回イスメ世界大会 in 北京（2010年8月1～6日）に出演した昭和音楽大学電子オルガンアンサンブルを指導、指揮した梅津優子氏によって、練習の過程や本番の様子が紹介された。

イスメ(ISME)とはユネスコ傘下の団体で国際音楽教育学会(International Society for Music Education)の略称であり、音楽教育のオリンピックといわれる世界大会が2年に1度開催されている。今回の大会においては、論文発表、シンポジウム、ワークショップ、ポスターセッションなどと共に、世界各国から86団体によるコンサートが行われている。昭和音楽大学電子オルガンアンサンブルは日本から参加の2団体の一つとして、3種類のコンサートを開催した。

スコアリーディング奏法における電子オルガンアンサンブルのスタイルでの、パート分けーアレンジの実際や、演奏に際しての楽器やアンプスピーカーの配置の仕方など、現場での工夫が紹介され、それはこの電子キーボード音楽学会全国大会での研究コンサートで実物を見聞きするプレ解説としても興味を惹かれた。

指揮者の観点から、オーケストラと比較して、電子オルガンの奏者のアンサンブルに対しては、「呼吸」を揃えることの重要性が強調された。とかくサウンドに感心が行きがちな対象であるが、演奏の本質を問題視していることが、一步踏み出した感を抱かせ、電子オルガンアンサンブルの次なるステージを予感させる内容であった。

研究発表⑥ 電子オルガン普及の将来的可能性を考える

ー自治体、学校、バレエ協会との共催体験を通してー

佐藤 美千枝（菅波楽器顧問）

本発表では、社会と電子オルガンの関わりが、発表者自らの催事企画、運営の実例を挙げて紹介された。

「自治体」(東京都町田市)との協力においてはNPO法人町田芸術協会を立ち上げ、電子オルガンを「一人オーケストラ」「弦楽器や管楽器との共演」「BGM」という捉え方で活躍の場を創成、「町田ジュニアフェスティバル」の開催へとつながって来た経緯を説明した。

タイのバンコクでの日本人学校と国際学校との「国際交流」はすでに5周年を迎えている。電子オルガンのライブ演奏とバレエとの共生の場合もバレエ関係からの好評を得て、このスタイルの定着に向かっており今後は自治体との共催予定にある。以上の興味深い催事の数々が紹介された。

どの催事も一過性のものでなく継続することによって発展し続けている事例として参考になる点が多く見受けられた。

そして何より本発表での特異性は、発表者の佐藤氏が元々楽器店の経営サイドにいたとはいえ、電子オルガンの可能性と有効性に惚れ込んで、ボランティアの立場で事を起こしている情熱にあらう。



プログラムで状況説明をする佐藤美千枝会員

電子オルガンと社会を積極的に結びつけたいという思いと、その機会の必要性を自ら創造しているパワーに敬意を覚えるとともに、その前向きな姿勢が電子オルガン関係者を勇気づけ、明るい将来展望を垣間見ることができた発表であった。

研究発表⑨ 海外の電子キーボード活動レポート

ー日本はそこから何を学ぶべきかー

阿方 俊 (昭和音楽大学)

本発表は海外における最近の電子キーボードの活動事例2件を紹介し、教育内容の方向性、演奏実例のネットでの発信の有効性、活用のあり方を示唆するもので、今後の研究対象として興味深いものであった。

一つ目の事例は、中国の音大電子オルガン専攻出身者2名、Qi Zhang (張琦、上海音楽学院電子オルガン科卒、USCマスタークラス・オルガン専修)とWeicheng (趙偉成、天津音楽学院電子オルガン科卒、USCマスタークラス・オルガン専修、エレクトーン・インターナショナル・コンクール・グランプリ)のアメリカ(USC)におけるパイプオルガン専修の事例においては、電子オルガン専攻生のオルガン界への進路創出とオルガン音楽の追求による電子オルガン教育内容への伝統音楽の本格的な取り入れを期待させるものであった。

二つ目の事例はイタリアにおける一段電子キーボードによるオペラ公演について。ローマのフライアーノ劇場(4台の一段電子キーボードによるオペラ“トスカ”“蝶々夫人”の定時公演)の様子、ロッサーナ・シクラリ芸術監督の本学会へのあいさつ(2009年4月収録)とイタリアオペラの新時代へ向けた電子キーボードの必要性(A.マダウ・ディアツ元ミラノ・スカラ座芸術監督の本学会への期待…2010年9月収録)がVTRで紹介された。

オペラの本場イタリアでもハイテク時代の社会変化に適応するため、一段電子キーボードによるオペラ公演が行われはじめているという現実、我々の学会活動の意義を多に勇気づけるものである。日本で行われている、電子オルガンでのオペラ演奏音スタイルとは異なるが、奏者の創出(ピアニストからの転身)や、より一般性のある一段キーボードを使うことで演奏機会の創出が期待できる分野として、日本でも本腰を入れて考えるべき時にあるのではないかと思わせる発表であった。

研究コンサートレポート

～ハイブリッド・オーケストラによるアンサンブル～

研究コンサートは毎年、会場校の特長を活かした内容で行われている。今回は、昨年の文教大学の吹奏楽部と音楽専修生の電子キーボード（弦楽器担当）による「ハイブリッド・オーケストラ」に続き、以下のプログラムによる電子オルガン（電子音）と伝統楽器（アコースティック音）による演奏であった。

【プログラム】

1. ムソルグスキー／ラベル編 より、第一プロムナード、死者と共に死者の言葉で、バーバ・ヤーガ、キエフの大門
2. チャイコフスキー 交響曲第6番“悲愴”より、第1楽章

【演奏者】

ムソルグスキー “展覧会の絵”

- ・ 指揮 梅都優子（しょうわ・ジュニア・オーケストラ副指揮者）
- ・ 電子オルガン 水野史織、鈴木栄奈、大畑尚美、澤岬奈摘
- ・ 打楽器 梅崎郁美、中丸敦博、藤原耕

チャイコフスキー “悲愴”

- ・ 指揮 太田 茂（昭和音楽大学准教授）
- ・ 電子オルガン 佐々木果奈、千葉祐佳、鈴木栄奈
- ・ フルート 福井彩奈、岡崎由紀乃、十束真梨子 ・ オーボエ 梶原雅代、上遠野瑞季、
- ・ クラリネット 北村真梨奈、飯塚健太 ・ ホルン 永井隆太郎、林季穂、渡邊千尋、坂本有維、古巢あゆみ、海野夏実 ・ ファゴット 松尾友治、堀内喜笑
- ・ トランペット 與座有璃、福田有加 ・ トロンボーン 村上美希、小田彩乃、小室洋平 チューバ 阪井賢哉 ・ ティンパニー 藤原耕

司会 初山正博（幹事）

“展覧会の絵”の演奏は、イスメ（世界音楽教育学会）世界大会 in 北京 2010 に出演した電子オルガンコース有志による演奏で、電子オルガン4台に伝統楽器奏者3名が加わったハイブリッドオーケストラで電子オルガンが主体となったもの。これに対して“悲愴”の方は、昭和音楽大学の合奏（管分奏）の授業で行われているハイブリッド・オーケストラの紹介で、電子オルガンは弦楽器に特化したものであり、管打楽器は原曲のままであった。前者については、第5回大会研究発表①で、後者に



については第6回大会の研究発表③で詳細が説明されているので、大会報告の該当項を参照していただきたい。現在、音楽大学の大半は管楽器および打楽器専攻の学生数に比べて弦楽器の学生が少ないのが現状である。この状態の打開策として興味のあるコンサートであった。（阿方）

第6回全国大会へ出席して

「一留学生の感想」

程 松野／大連大学・聖徳大学

私は、中国の大連から来た程 松野と申します。現在は中国の大連大学音楽学院でピアノの先生をしながら、聖徳大学大学院音楽文化研究科音楽専攻の博士後期課程1年に在学中です。

私の指導教官、聖徳大学大学院の水垣玲子教授の紹介で、昨年、日本電子キーボード音楽学会に入会しました。昨年、文教大学で開催された第5回全国大会と今年の昭和音楽大学で開催された第6回全国大会に出席することができました。この大会での流れやパネルディスカッションのテーマの設定は、私にとって印象深いものでした。パネルディスカッションのテーマは、専門教育に関する演奏の現状や、音源の使用、エフェクト、伴奏づけなど、鍵盤楽器基礎技能の諸方面にわたるばかりでなく、電子オルガンの社会的認識や、生涯教育、福祉活動にも及んでいました。さらにアメリカ、タイ、中国など海外の電子キーボードに関する活動も報告されており、私にとって、有意義な一日を過ごさせていただき、とても良い勉強になりました。

中国で電子オルガンが初めて導入されたのは、1985年代以後のことです。YAMAHA 株式会社による講師養成コースを契機に、教育活動も始まりました。当時は中央音楽学院や上海音楽学院、天津音楽学院など華北地域を主に教育が進められてきました。1990年代に作陽音楽大学で学んだ瀋陽音楽学院の沈曉明氏によって中国の音楽大学における初めての電子オルガン学科が設置され、その時点から中国における電子オルガンの教育は YAMAHA システムだけの状態を脱して専門教育として発展してきましたが、社会的な影響はあまり強くなりませんでした。

現在の中国における政治の安定、経済の繁栄、及び文化の開放という社会環境に伴って、今後は電子オルガンの発展に必要な諸条件が基本的に整ってくると考えています。また大学の専門教育のほか、教養として学習する小中学生や社会人学習者も増加していくと私は思います。それゆえに、聖徳大学大学院で中国における電子オルガン教育の軌跡と現状を博士論文として研究して行きたいと考えています。この歴史と現況を深く研究することは、電子オルガン音楽の理論的な裏付けとなり、今後の発展を促すと期待しています。

卒業をした後、大連大学の職場に戻り、勉強の成果を生かして、日中交流に尽力したいと思っています。

雑感 ー第6回電子キーボード音楽学会に参加してー

金銅英二／松本歯科大学口腔解剖学第一講座

10月10日(日)昭和音楽大学にて開催された第6回総会と研究発表会に参加した。過去5回程参加させていただいているが、今回は特に学会の雰囲気の変化を感じた。それは参加されている会員各位が音楽の世界での自分と他者の立ち位置を認め合い前向きなエネルギーになってきたという感触である。ある種の一体感を感じた。本学会には狭いながらも様々な方向性、分野が存在し、その分野を一生懸命追及している人達がいる。当初は、何でそのような取り組みをしているのか？かえって遠回りではないのか？社会では誤解を招くのではないのか？なぜ私が(私の活動が)理解されないのか？などの思いが会員各位に多々あったように感じた。そのような思いを持ちつつ、各人が社会生活や音楽の現場で電子オルガンや電子キーボード楽器を活用し、よい・悪いの様々な評価を受け留めながら継続してきた活動や研究をお互いに理解しえた時、共感になり、自分への力付けにもなった気がする。今回のような一体感を感じた学会の開催校が第一回開催地の昭和音楽大学であったのも因縁めいた

気がする。これまで議論してきた様々なことが参加者の中で消化吸収され次へのエネルギー源になってきたのかもしれない。研究発表会の最後に企画された研究コンサートでは未来ある若手音楽家が他

の楽器奏者とクラシック音楽を演奏する姿に電子楽器の1つの明るい方向性を感じた。共演していたアコースティック楽器奏者が、将来電子楽器を活用した音楽を自然に展開すること（明るい未来）を容易に想像できるコンサートであった。

これまでの色々な経緯で「オルガン＝電子オルガン」にこだわる私は、学会では極少数派勢力(?)である。今後の課題はもっと異分野の会員増ではないかと考える。また、公共性のあるコンクールの開催、国際化なども次の課題ではないかと考える。さらに、参加企業についてもまだ開拓の余地はあると考える。規模が大きくなることが良いとは一概に言えないかもしれないが、今後も異論・議論を交わし、ぶつかり合って前向きな方向性を社会や業界に提示・提案・発信できる学会、会員相互が信頼し協力できる学会が維持継承されることを望みつつ本学会ならびに会員各位と電子音楽界、電子楽器業界の益々の発展をお祈りしたいと思う。また、学会を牽引してこられた幹事・大会組織委員はじめ多くの皆さまに感謝したい。

「第6回全国大会に参加して」

芝崎 ひろ子/jet 会員

今回、シュテファン・メラ教授の基調講演があることを知り、是非拝聴させていただきたく、第6回全国大会に参加し、入会申し込みを致しました。

私はjet 全日本エレクトーン指導者協会（自宅を中心に指導をする人のための全国組織）の会員として、ヤマハミュージック関東水戸支部に所属しております。12年が経過した頃に野口剛夫先生率いるJEO(ジャパン・エレクトロニック・オーケストラ)と出会い、創立10周年の演奏会から奏者の一員として活動をさせていただいております。

JEOは、1999年に創立されて以来、電子オルガン（エレクトーン）4台によるクラシック作品のカットなし全曲演奏を続けてきた電子オーケストラです。4人の奏者が、高弦・低弦・金管・木管の各パートを担当して、指揮者のもとで全員がスコアを見ながら演奏をします。

エレクトーンから音楽を始めた私にとって、100人のオーケストラで奏でる作品を自分のフィールド（電子オルガン）で学ぶことができる点や、独奏では気づかなかった己の問題点を知ることができる、大変有り難い場です。

JEOは基本として年2回の定期演奏会を催しています。今回、学会で基調講演をされたシュテファン・メラ教授とは、2010年3月18日、ヤマハエレクトーンシティ渋谷で開催された第21回JEOの定期演奏会で、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番を共演させていただきました。メラ教授は、ヤマハハイブリッドピアノ AvantGrand を演奏され、オール電子楽器によるピアノ協奏曲が実現しました。

メラ教授は情感豊かな音楽をもって確実にオーケストラをリードしてくださいました。また、ご本人もハイブリッドピアノの打鍵の感覚や響きについて、奏法についても短時間のうちに非常に注意深く分析され、楽器の個性を理解されたうえで本番に臨まれておられたように感じました。普段よりJEOで野口先生が奏者に向けておっしゃられていることが目の前で行われた、そんな気が致しました。すなわち、「楽器は目的ではなく音楽のための手段である」「楽器の機能ではなく、演奏者が音楽家として優れていることが必要なのです」ということです。

このピアノ協奏曲から何をどう感じられたかを基調講演という場で何うことができ幸いでした。

今回の入会を機に、己の活動の意義を考えるのと同時に、フレッシュな気持ちで皆様と情報交換をさせていただきたく存じます。よろしくごお願い申し上げます。

電子オルガンが「楽器」になるために

先日行われた全国大会の直前に学会に入会させて頂きました。ここで私の電子オルガンに対する考えを述べてみたいと思います。私は幼い頃からヤマハのエレクトーンを習っていますが、演奏者の立場からこの楽器と接する中で、常にこの楽器のアイデンティティは一体何なのか、という壁にぶつかっていました。こちらの学会にはエレクトーンのみならず、多種多様な電子キーボードに日頃から関わっている方が沢山いらっしゃり、全国大会でも「電子キーボード」というものに対する様々な立場からのご意見を拝聴することができました。その中で電子オルガンに対する意見の多くは、電子オルガンの「楽器性」を再認識する必要がある、ということでした。電子オルガンはアコースティックな楽器でもなければ、シンセサイザー程の機械の精密さも持っていませんが、それでも電子オルガンは「楽器」だと考えています。先程アイデンティティについて触れましたが、私は「リアルタイムに、自分で一つの音楽を創り上げる」という部分に電子オルガンの究極のアイデンティティがある気がします。それは、他の誰でもなく「自分」を一心に曲に込めるということであり、その時点で決して何かの「再現」ではないということです。再現を超えた、自分だけの表現。もちろん、そこに音色やリズム等機械的な側面の技術の発展や知識が必要だということは重々承知しています。しかしそれは必要悪なのではないでしょうか。芸術家にとって技術がそうであるように。つまりその部分がメインなのではない、と私は考えています。電子オルガン奏者にもっと芸術家であってほしい、少なくとも私はそういう奏者になりたいと思っていますし、皆様のご意見を伺う中でより一層この気持ちが強くなりました。今までとは一歩離れた視点でエレクトーンを見つめることができた今回の大会をご紹介下さった森松様、そして当日出会えた全ての方々へ感謝申し上げます。今後とも宜しくお願い致します。

《編集後記》

6回大会の報告号が諸事情のため遅くなりましたが、ようやくお届けすることができほっとしているのが実感です。第6回は、学会として国際化を積極的に進めて行くという方向性に呼応して、基調講演にウィーン国立音楽大学のシュテファン・メーラー教授を迎え、電子ピアノで電子オルガンアンサンブルと共にピアノコンチェルトを演奏したことをベースにした実践的スピーチをいただきました。パネルディスカッションは今年のテーマの継続ということでより深化したディスカッション、研究発表では多彩な顔ぶれの発表、また新しい動きとしてラウンドテーブルやランチタイムミーティングが加わり、研究コンサートも授業の紹介という形でハイブリッドオーケストラが演奏され、更に充実した内容となったのではないのでしょうか。第7回大会（11月12日、東京学芸大学）は学会名を日本電子キーボード音楽学会と「音楽学会」としての最初の学会となります。更なるみなさま方からの積極的な提案や発表が期待されます。（阿方）